

令和五年度

青少年の健全育成に関する

作文コンクール作品集

川口市青少年保護育成本部

川口市教育委員会



目次

へ最優秀賞へ

見えないやさしさ

青木中央小学校

五年

上野 愛依

2

諦めることなんて何一つない

南中学校

三年

森口 尚吾

4

へ優秀賞へ

人を笑顔に

青木中央小学校

五年

早川 颯人

8

班長としての行動

青木中央小学校

六年

青田 唄

10

夢をかなえるために、今していること

辻小学校

六年

山本 美紅

12

「栄光の扉」

南中学校

三年

山本 侑茉

14

住みよい街にするために

川口市立高等学校
附属中学校

三年

齊藤 杏

16

「櫂と絆」

川口市立高等学校
附属中学校

三年

中野 優志

18

へ入選

おばあちゃんとの約束	上青木小学校	六年	制野 莉和	22
どんどん伝われハッピーウイルス	戸塚東小学校	六年	大谷 陽琉	24
「伝わるよろこび、伝える声」	戸塚東小学校	六年	川本 武蔵	26
あたたかい家族	戸塚東小学校	六年	平戸 心彩	28
人のために行動したこと	辻小学校	五年	瀬川 叶愛	30
「当たり前」	南中学校	三年	土倉 侑馬	32
あの子も	青木中学校	三年	塚本 三菜	34
野球を通して得たもの	幸並中学校	三年	福原 侑真	36
野球でつながった僕たちの絆	川口市立高等学校 附属中学校	二年	小岩 大純	38
今の自分から、過去の自分へ	川口市立高等学校 附属中学校	三年	中村 茉莉子	40

へ佳作▽

夢をかなえるために

青木中央小学校

五年

小平 透真

44

委員会で学んだこと

青木中央小学校

六年

伊藤 詩織

46

任された仕事

青木中央小学校

六年

地藤 龍之介

48

仲間の存在が大きな力になる

根岸小学校

六年

新井 希良々

50

人のために行動したこと

戸塚東小学校

六年

上原 幸晃

52

食器洗い

辻小学校

五年

鈴木 常葉

54

絆はいずれ自分を動かす原動力となり

青木中学校

二年

金子 真識

56

「今、伝えたいこと。」

青木中学校

三年

安藤 拓海

58

「仲間との絆」

十二月田中学校

二年

石原 雪羽

60

努力は報われない

川口市立高等学校
附属中学校

一年

杉本 萌々音

62

令和五年度 作文コンクールテーマ

小学生の部

- ・ 人のために行動したこと
- ・ 夢をかなえるために

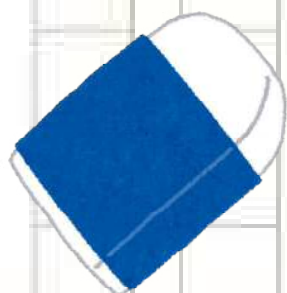
中学生の部

- ・ 今、伝えたいこと
- ・ 仲間との絆を感じたこと

応募総数 1022作品

たくさんのご応募ありがとうございました。

最優秀賞



見えないやさしさ

青木中央小学校 五年 上野 愛依

みなさんは、人のために行動したことがありますか？わたしは、あまりありませんでした。でも、小学校四年生の秋、こんなことがありました。

その日は、母と姉と公園で遊んでいました。するとそこに、町内会のおじさんが大きくなりすぎた木のえだを切っていました。

そのおじさんは、通学路で子ども達が安全にわたれるよう交通整備をしてくれたり、わたしが小学校一年生のころ、小学校の授業で昔の遊びを教えてくださいました。

「その切ったえだはどうするんですか？」

とたずねると

「切ったえだはひもで結んでゴミの日に出すんだよ。細いえだは風がふいて折れて、子ども達がケガをするとかぶないので切ってしまうんだよ」

とやさしく教えてくれました。

わたしは、公園をいつも同じだと思っていたの

でおどろきました。

「これ、全部一人で集めるんですか？」

と聞くと

「後から来るけど今は一人なんだ」

と答えてくれました。

いつもおじさんは季節が変わるごとにわたし達を思っていてくださっているとわたしは思い、「だったらわたし達が手伝います。一人でやると夕方いっぱいかかると思うので」

と言って、わたし達は手伝いました。

実さいにお手伝いをする、かがんでえだを集めるのでこしや、足がいたくなりました。おじさんは、「大じょうぶ」と気づかってくれたり「ありがとう」と何度も言ってくれました。その後、町内会の人やおじさんのおくさんが来て、わたし達が手伝ったことをほめてくれました。

そして、春になると公園の花を植えかえたり、時々町内会の人達でゴミひろいをしていることを教えてくれました。

そのことを聞いて、みんなが気付かないところで、みんなのためにがんばってくれている人がいる事をわすれないでいようと思いました。

そして、公園をこれからもキレイに、大切に使用していきたいと思いました。

それまでわたしは、人のために行動したことがあまりありませんでしたが、ほめてもらった時は少し、照れくさかったけれど、とてもすがすがしい気持ちになりました。これからは、人に気づかれない事でも自分から進んで行動していきたいです。

諦めることなんて何一つない

南中学校 三年 森口 尚吾

私は小五の春休みに白い壁に囲まれた部屋に入院していた。「左大腿骨頭すべり症」という難病だった。すぐに入院、手術となった。手術後は、松葉杖で四か月過ごし、一年以上運動することを禁止された。

病気になる以前、私はテニスクラブの育成コースで週に五日テニスをしていた。プロテニスプレイヤーを目指していた。練習はとても厳しかったが、とても楽しかった。毎日夜遅くまで黄色いボールを追いかけていた。

病気にならなかつたら、硬式テニス部のある中学に行きたかった。でも、中学入学時は病気が完治するかかわからず、硬式テニス部のない南中に入学した。私は、囲碁将棋部に入りながら、塾に通い、少しずつテニスクラブでの練習を再開した。病気が再発する可能性もあった。でも諦めたくなかった。勉強も、テニスも、私の未来を全て諦め

たくなかった。好きなことを続けたかった。

中二の時、ようやくテニスの試合ができる程度に体力が回復してきた。その時に書いた「県大会出場」の七夕の短冊はまだ部屋の壁に貼ってある。シングルスは強敵ぞろいで県大会出場は難しいが、ダブルスなら県大会に行ける可能性がある。ダブルスで県大会に行きたい。夏休みに偶然テニスの試合で同じ学校の後輩を見かけてダブルスに誘った。学年も、所属テニスクラブも違う後輩とのダブルス練習はなかなかできず、中学のテニスコートを借りて二人で朝練をした。その結果、秋の新人戦で県大会三位になった。来年は関東大会出場だ。未来が急に広がった気がした。

そして、中三になり、いよいよ最後の学総が始まった。ところが、お互い忙しくダブルス練習が不足していた私たちは、地区大会で意思疎通ができず結果が出なかった。なんとか行けた県大会も、準々決勝で負けてしまう。まだ順位決定戦があったが、私は勝てる気がしなかった。ただ、ダブルスのパートナーの後輩は諦めていなかった。彼の諦めない強い気持ちを聞き、私は戦う覚悟ができた。気持ちが一つになった私たちは圧勝し、関東

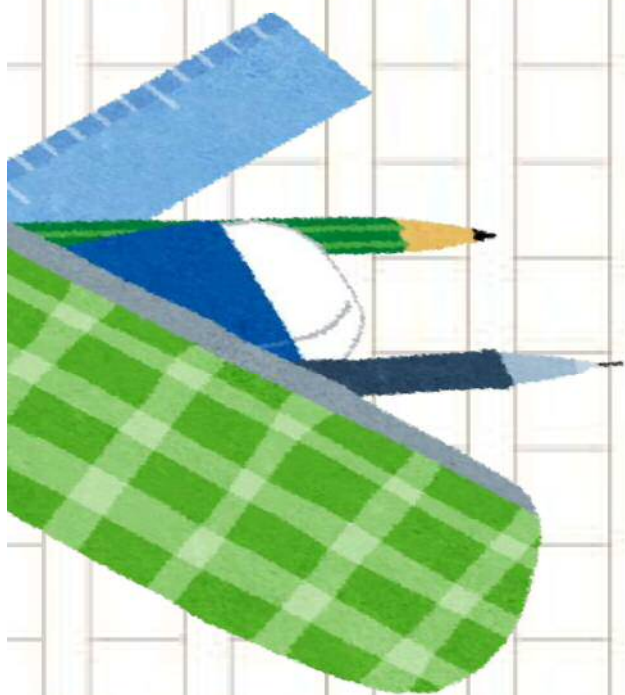
大会の出場を勝ち取った。ようやくたどり着いた関東大会は、県大会とは全く違う世界だった。

対戦相手の掛け声、連携した動きのすべてが強そうに見えた。これが関東大会なんだ。大舞台の空気は私たち二人を委縮させた。得意のサーブも、連携も、何もかもうまくいかなかった。自分たちはらしいプレーはさせてもらえなかった。私たちは一回戦で完敗した。悔しかった。関東大会に出場するだけでうれしかった気持ちがどこかに吹っ飛んでいた。まだ次がある。そう思えた。

今、私は思う。諦めることなんて何一つない。願ったことが全然うまくいかないことも私は知っている。むしろ、うまくいかないことだらけだ。頑張っても、頑張っても、思い通りにはならず、何度も負けてきた。諦めそうになってきたとき、家族、友達、コーチ、学校の先生に正直に話をした。きっと自分だけで考えていたら、諦める道しかなかったかもしれない。みんなに相談して、みんなに助けられた。県大会では教頭先生に駆けつけてもらい試合にできることができた。たくさんの方々に助けられたからこそ関東大会に出場できた。みんなには本当に感謝してもしきれない。

四年前、病院のベッドの上で今の自分の姿を想像することはできなかった。あの時、諦めていた今の私はいない。うまくいかないことばかりでも、諦めずに少しずつ積み重ね、みんなに助けられてここまでできた。諦めることは簡単だと思う。でも、私はテニスが好きだから、好きなことを諦めきれなかった。諦めたらそこで終わっていた。諦めずに一歩、二歩と歩いた先には、まだ続きがあった。関東大会の青く広い空を私は忘れない。私は今伝えたい。諦めることなんて何一つない。諦めないその先を歩いていこう。

優秀賞



人を笑顔に

青木中央小学校 五年 早川 颯人

ぼくの住んでいるマンションに、かいごでデイサービスに通うおじいさんと、デイサービスのおむかえの車までお見送りをするおばあさんが住んでいます。ぼくが習い事や買い物や遊びに行く時にたまに下の通路で会うので、「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」とあいさつをしています。その時におじいさんはぼくに、大きくなつたね、今日は寒いね、元気だね、と笑顔で話しかけてくれました。今年になり、しばらくしてからおばあさんに会った時におじいさんが亡くなった事を聞き、おばあさんが

「おじいさんはにんちしようで色々な事をわすれていつてしまうけど、あなたたちの事は下で会えるのを楽しみにしている」とよく話していたのよ。本当にありがとうね。」

と言われ、お母さんとぼくはあたり前にするあいさつが人を元気にしたり、笑顔にしたり、よろこ

んでももらえたりする事を知って、ただ人とかわすあいさつだと思っていたけど人とのつながりを作ったり、人の心も自分の心も温かくする言葉だと思いました。

それからしばらくして、おばあさんと道で会いました。またおばあさんが話しかけてくれて、「私は今、にんちしようのお年よりをかいごする人たちの相談にのったり、講演会で話しをしたりする仕事をしているのだけれど、あなたたちとあいさつの時にお話しをするのを楽しみにしていたおじいさんと笑顔であいさつをして答えてくれたあなたたちの話しをする事になったのよ。」

と言ってもらえて、とてもうれしい気持ちでいっぱいになりました。小さいころからお母さんやお父さんに、あいさつだけは大きな声でみずからするんだよと口うるさく言われてきましたが、それがなぜ大事なのか分かる気がしました。あたり前な事ができない時や、できない人もいたりしますが、小さな事でも人を笑顔にしたり元気づけたり人のためになる事があって、それが自分に大きなよろこびになってかえってくると思いました。人のためになること、しょう来の夢はまだわかりま

せんが、人を笑顔に出来るような人間になりたいです。そしてしよう来は、人を笑顔にする仕事が出来たらいいなあと思います。今は、おじいさんが亡くなって一人になってしまったおばあさんが少しでもさみしくないように、会ったら笑顔であいさつをしてお話しをしたり、お花が好きなように花をプレゼントしようかなと考えています。初めは見知らぬ人だったけどあいさつがきっかけで、笑顔になってほしいと思う人になりました。これが人のためになっているといいなあと思いました。

班長としての行動

青木中央小学校 六年 青田 唄

私は、今、通学班の班長をしています。私の班は、四年生が一人、三年生が一人、一年生が三人います。私は、六年生になって、初めて班長になりました。今まで私の班には一年生が一人以上入ってきたことがあります。ですが、今年に限って三人の一年生が入ってくるなんて、おどろきました。私は、班長として、三人の一年生の面倒を見られるだろうかと不安になりました。

集合場所から学校まで約十分かかります。十分の間、何事もなく安全に学校に行けるだろうかと心配になりました。初めて一年生三人を連れて登校したときには、二十分かかってしまいました。なぜなら、私が考えていたよりも一年生の歩くスピードが、ゆっくりだったからです。これでは、八時までに到着できないと思った私は、集合時間を早めることにしました。「集合時間を早めよう」と、みんなに伝えるとき、相手に気持ちよく伝わ

るように、相手が理解できるような優しい言い方をしました。それを聞いたみんなは、笑顔で賛成してくれました。

八時前に登校できるようになると、一年生の三人の中で一番先頭になりたいと、言い出すようになりました。最初は、一年生にやり方を任せていました。じゃんけんをしたり、早く集合した順にしたりしていました。よく見ていると、平等なやり方ではないなと感じ、みんなが平等に先頭になれるような案を考えました。考えた案を提案してみると、みんなが納得して受け入れてくれました。みんなが楽しく登校できるような案を考えることができてよかったと思いました。

毎日登校していると、ときには注意をしなければならぬこともあります。特に、危ないなと感じたときには、少し強めに注意することもあります。一年生から見た六年生は、大きく怖い存在かもしれません。けれども、言わなければ伝わらないので、注意されたことがきちんと伝わるように分かりやすい言葉で言うように心がけました。

私は、通学班の班長を通して、様々なことを経験し、学びました。今まであまり気にしていなか

ったことにも気づきました。通学路には、じゃんけんおじさんや立しよう当番などの保護者の方々、地域の方々が協力しているからこそ、私達は、安全に登校できていると、感じました。これから、そのことを忘れずに班長をしていきたいと思えます。

夢をかなえるために、今していること

辻小学校 六年 山本 美紅

私のしよ来の夢は、農業関係者になることです。具体的には、野菜などの品種改良にたずさわる仕事をしたいと考えています。

私がこの仕事をしたいと思ったきっかけは、祖父でした。私の祖父は、しゅみで農業をしています。様々な野菜を育てていて、私もたまにしゅうかくなどの手伝いに、畑に遊びに行っていました。何度かしゅうかくの手伝いをしているうちに、農業に興味を持つようになりました。高学年になってからは、しよ来、農業関係者になりたいとはつきり思うようになり、自分が興味を持ったことは、すぐに調べるようにしていました。

しかし、様々なことを学んでいるうちに、自分は農家になって、いったい何をしたいのか考えるようになりました。そのときに思ったのは、ただ農家になりたいのではなく、何か新しい物を作ってみたのではないかということです。そのため

私は、ただの農家ではなく、品質改良にたずさわる人になりたいという、具体的な夢をいだくようになりました。

そして今私は、その夢をかなえるためにがんばっていることがあります。それは、中学受験です。私がめざしている学校は、理科に力を入れている学校です。自分の夢をかなえるためにはどうすれば良いかなやんでいるときに、この学校を見つけ、ここに入って勉強したいと思うようになりました。しかし、実際に勉強を始めみると、思った以上に大変で、やめたいと思うことも何度もありました。そんなときは、リラックスしながら、受験に受かったらやりたいことや、夢をかなえている自分の姿を想像して、がんばりました。そのおかげで、始めはとても低かった合格率を八十パーセント以上にまで上げることができました。

それから、夢をかなえるためにやっていることが、もう一つあります。今は祖父が亡くなってしまっているため、祖父と畑をすることができません。それでも、家の庭で野菜を育てて、様々な観察をしています。たくさん野菜を育てているうちに、新しい知識がどんどん身についていき、夢

に少しずつ近づいているのを実感できるように
なりました。

自分のなりたい仕事につくことは、簡単なこと
ではないと思います。それでも、苦しくても努力
して、夢を持ち続けることで、夢をかなえること
ができると考えています。そのことを信じて、後
かいのないよう努力し、自分のやりたいことをす
る、明るい人生にしていきたいです。

「栄光の扉」

南中学校 三年 山本 侑菜

一年前のこと。女子はフリーリレーで関東大会目指そう！と部のミーティングで、話があった。顧問の先生と各自目標タイムを決めたが、それは当時の私のベストタイムよりも七秒も早いもの。それが私だけではなく、メンバーみんなが大幅にタイムを伸ばさなければいけない目標だった。関東大会への高すぎるハードルを感じた。

私は一、二年の一年間で二秒くらいしかタイムが伸びてない。正直、厳しい。メンバー四人中三人は競泳は中学の部活からのスタートだ。日々地道に練習をした。初めて県合宿に参加させてもらった。想像を超える練習量だった。一日七〇〇メートルを一日に二回と泳いだことない距離だった。県で上位の選手の努力を実感した。ついていけない、無理だと思ったけど、自分のできる限りのことをした。先生の励ましや周りの選手たちの努力を見て頑張らなきゃと思った。

シーズンが始まると、部員のみんなのタイムが少しずつ伸びてきて、リレーメンバーも激化した。「負けないから！」と言い合ってチーム内での競争も始まった。私はリレーメンバーほぼ確定していたが、頑張らないと負けそうとすら思うほどみんな一生懸命でいい刺激を受けた。水泳は個人スポーツだけど、みんなで頑張っていると実感したのはこの頃からだ。

県学総の予選。最後から二番目の組。一泳を任された。周りの人たちは速い人ばかりだ。先生からは沢山のアドバイスをもらっていた。その中でも私が一番好きだった言葉は「楽しんで！」だった。実際、レースで楽しめる余裕なんてない。だけどその言葉は緊張をほぐしてくれてテンションを上げてくる魔法の言葉だった。私はレース前その言葉を聞いて「最高に楽しんでやる！」と強く思いやる気が溢れ出た。十位以内だと決勝に進める。気合十分だ。リレーメンバーとも決勝に行くことと声を掛け合った。

レースでは三人がベストタイム。全体でも最高のタイムだった。ベストは尽くした。あとは最終組のレースで二チームより速いかどうかで決勝に

行けるかが決まる。リレーメンバーと先生と一緒に最終組のレースを見守った。どのチームも速い。「どうかなー」「いけるかなー」。口々に思いを発していた。「やったー!!!」十位ぎりぎりですべてに決勝に残った。十一位とは僅差。なんと0・0四秒差だった。

リレーは個人のタイムの積み重ねで、個々にタイムを伸ばせばいいと思っていて。でも今は違う。同じ目標をもった仲間と練習を共にし、いい刺激を受けることもっともつと頑張ろうという気持ちになった。私たちはわかりやすく言葉で頑張ろうとはレースの前だけ言い合い、日頃は環境や雰囲気です意思疎通していた。絆ができたという言葉がぴったりだ。

翌日の決勝では、予選と同じく十位だった。全国大会出場チームを除く上位三チームが関東大会に出場できる。私たちは全国大会出場チームを除くと五位だった。あと二チームを抜かすことはできなかった。関東大会は出場を逃したけど、正直ここまで近づけるなんて一年前の私は想像もしていなかった。

部活を通じて、努力する辛さから繋がっている

楽しみを学んだ。目標達成はできなかったが、とても満足している。先生、リレーメンバー、部員のみんなとの絆が強まっていいチームができた自信をもって言えるからだ。負けてもいい。負けたものから得られるものがあるんだと知った。入学の時迷っていた部活選び。本当に水泳部に入部してよかった。

最後に、くれは、みはる、にな、ななみ、はつちやん一緒にリレーで泳げてよかった。応援を沢山してくれた部員のみんな、たくさん支えて育てくれた梅内先生、本当にありがとうございました。

住みよい街にするために

川口市立高等学校附属中学校

三年 齊藤 杏

私が住んでいる埼玉県川口市は、日本で二番目に多く外国人が住んでいます。昨年、私は総合の授業の際に川口市を外国人が住みよい街にするためにどうすればよいか、という研究テーマをもとに課題研究を進めていきました。研究を進めるにあたり、川口市の外国人に対する政策の現状を知りました。もちろん、外国人に対する政策には良いものもありますが、まだまだ住みよい街にするにはやるべきことがたくさんあることが分かりました。しかし、私は川口市が何か政策をとって外国人が住みよくする以上に私たち市民が外国人に対する考えを変えるべきだと考えています。川口市民の中には外国人に対する偏見を多く持っていたり、良く思っていないなかったりするなどの人がいるので、そのような人が変わらなと解決していかないのではないかと思います。

私が韓国に旅行したとき、地下鉄で問題が起きてしまい、改札を通ることができなくなってしまったことがあります。韓国には各改札に駅員がおらず、改札についているボタンを押し、遠隔で話をしなければいけないというものだったので、韓国語を話せない私たちにとって、とても大きな問題でした。そんな時、一人の男性が

「大丈夫ですか？」

と声をかけてくれました。日本語が上手すぎて始めは日本人かと思っただけけれど、東京で日本語を勉強したという韓国の方でした。その方は駅会社に通話をかけてくださったり、韓国語を日本語に通訳したりしてくれました。男性に感謝を伝えると「大丈夫ですよ、私も東京で日本語を勉強していたときにたくさんの方の日本の方に助けってもらいましたから。」

と言っていました。男性のおかげで私たちは無事に改札を通ることができ、充実した旅行をすることができました。

この経験から、私は人のやさしさは世界を超えて人をつなげるのだなと感じました。今回韓国で助けてくれた男性のように、人から恩を受けたら、

それを他の人に自分にしてもらったように行動する、ということができたら、やさしさの輪が広がるのではないかと思います。私もだれかが困っていたら勇気を出して行動してみたいと思いました。また、国籍が違うにも関わらず、困っていた私たちに声を掛け、助けてくれたということに感動しました。私は同じ日本人でも、人を助けるという行動をとれるかわからないので、男性のようにどんな人でも困っていたら助けてくれる人はすごいなと思いました。このような相手を気遣う行動をすると、それが人から人へとつながっていく良い連鎖が国境を越えて起こるので、大切なことだと思います。

しかし、親切にしすぎるのは返って良くないことにもなりうります。何でもかんでも相手が求めていないことまで行ってしまうと、その人のためにならず、良いことにはならないので、やさしさを考えなければならぬと思います。

誰にでもやさしくする、ということは難しいことだと思います。それをしていくためには、やはり自分が優しくしてもらえような人柄になるべきだと思います。誰かに親切にされたら、おのず

と自分も誰かに親切にしようという気持ちになれると思います。そうすることで、この街に住む私たちは外国人との関係が良くなっていくと思います。「やさしさ」の輪が広がっていく世界になっていけたら良いと思いました。

「襷と絆」

川口市立高等学校附属中学校

三年 中野 優志

前走者が近づいてくるその光景に、すべての責任と、皆の積んだ努力が押し寄せてくるのを感じた。駅伝で最終区を任された僕は、とても緊張すると同時に、興奮していた。

私たちの学校は設立してまだ間もない、新入りの学校であった。学校の一期生である私たちは駅伝部でも一期生だった。先輩がいない中で、仲間と一緒に絶え間ない練習を重ね、励まし合い、そして競い合ってきた。駅伝という競技は、実際に走るメンバーだけでの競技ではないと思う。

「駅伝部」という言葉を初めてきたのは、中学校に入学してから数か月経った頃。テレビなどで「駅伝」というものを見聞きしたことはあったが、その裏で「駅伝部」というものがどのような活動をしているのか全く知らなかった。ただ、学校の代表として招集メンバーの中に自分の名前がある

ことに、すこし喜びを感じていた。
「どのようなことをするのだろう」

そんな興味がわく中で迎えた練習はとても厳しいものであった。長距離は足を絶え間なく動かし、呼吸を荒くしながら酸素を取り入れる。当たり前だがとても苦しい。軽い気持ちで入部した自分を恨むこともあった。それでもなお、練習を続けることができたのは、同じ目標を持った切磋琢磨してきた仲間がいたからだ。顧問から活動中に常に言われたことそれは、「声を出す」ことだ。どれだけ練習がきつくても、「ファイト！」と声を出す。このたった一つの声が、仲間そして声を出した本人自身の心をもう一度奮い立たせ、根気強く走り続けさせる。雰囲気の良い部活動が生まれるのだ。そしてこれが「仲間と走る」というものだと感じた。駅伝という競技は、チームで戦うものではあるけれど、実際走るときは一人きり。だが、練習での「仲間と走る」ということが大きな役割を果たすのだと後に感じた。

私たちが走る駅伝は中学校駅伝大会と呼ばれるもので、男子は一区から六区までの六人。本番を走るためには、選ばれし六人にならなければな

らない。だから、メンバーは仲間であり、ライバルである。駅伝部一年目、僕は補欠だった。とても悔しい思いで会場に向かい、それでも仲間が走るから、とにかく応援した。そして、燃え尽きたかのように力を出し切った仲間を見て、とても感化された。

二年目、より一層本気で練習をした。去年よりも自分を追い込みながら重ねた練習。仲間と励まし合って、競い合った。そしてつかんだ本メンバー。僕は最終区の六区を任された。初めてつかんだ、本番走れる資格。とてもうれしかった。

迎えた本番、以前の喜びは影を潜め、緊張でこわばっていた。

「本当に走り切れるんだろうか」

そんな中で励ましてくれたのは、最後まで競い合い、結果補欠になってしまった仲間だ。仲間のためにも絶対走り切らなければならぬ。中継所で、仲間を待つ。緊張と興奮の中、襷を受け取った。

「我が駅伝部の魂ここにあり」

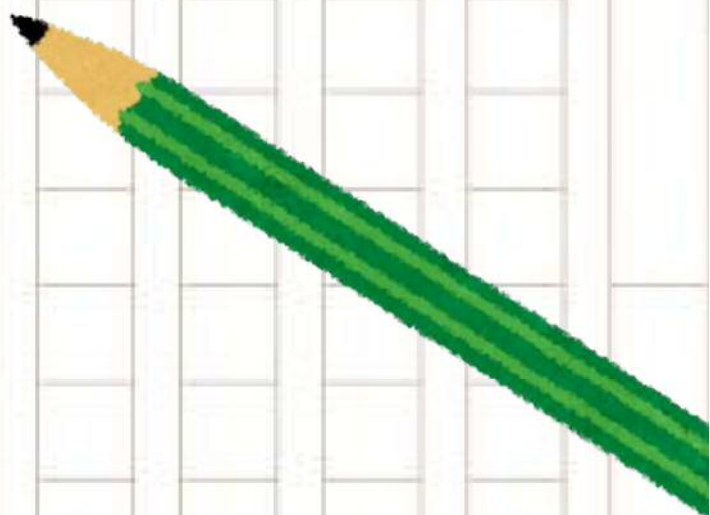
汗がにじんだ襷には、この襷をつないだ人のみならず、今まで練習してきた駅伝部メンバー全員の努力と願いがこもっている。だからこそ、絶対に

途切れさせてはいけない。それは責任の象徴であり、孤独で走るうえでの唯一の励まし、支えであった。一人で走っているわけではない。皆で走ってきた。その熱い気持ち絶え間なく足を動かし、つらくなっても決してあきらめさせることなくあった。そして、走り切ることができた。

絆というものは、時に責任や勇気をもたらす。仲間と培ったその関係は人を強くし、動かす原動力にもなるのだと学んだ。そんな絆を大切にしていきたい。

入

選



おばあちゃんとの約束

上青木小学校 六年 制野 莉和

私は、しょう来は絶対看護師になると決めています。私が看護師になると心にちかったのは、おばあちゃんが亡くなったことにあります。

なぜなら、私のおばあちゃんは、「看護師」だったからです。おばあちゃんのはがんの病気で亡くなってしまったのですが、私の中にもっとたくさん知識があれば、おばあちゃんはおっと少しでも長生きできたのではないのかななどと、思ってしまうことがたくさんありました。そこで、看護師になれば、医者の手伝いから看者さんの心のケアまでできると思いました。おばあちゃんのあとをついで「もっと私がちゃんとしていけば・・・」と思うことのないよう、思わせることのないようにしたいです。

私は、できることなら「誰一人病気になるてかからないで、全員が幸せに暮らす」そんなことを望んでいます。でも、そんなことはできないから、

できるだけ早く治したり、一日でも多く、幸せだと感じられたらいいなと思っています。

おばあちゃんのおそうしきに行ったとき、骨になったおばあちゃんを見て、私は大号泣しました。自分でもなぜだかわからなくて、こわくて泣いているのか、悲しくて泣いているのか、でも、そんな気持ちの入り混じった中、私の中で確信がもてたことが一つありました。それは、おばあちゃんのような一人一人に気をくばれる人になることです。

私は、ある時おばあちゃんに、「病氣の人を見つけたら、どうする。」

と聞かれ、

「救急車を呼ぶ。」

と答えたら、

「自分で少しでもわかる情報を持つこと。」

と言われました。このときのおばあちゃんの強い、一寸のくるいもない目を覚えています。そのときに私は、おばあちゃんのように、誰でも、何でもたのめるような、任せられるような人になりたいと思い、それが「看護師」という夢につながりました。

だから私は、あのときのおばあちゃんの言葉を
わすれずに、人を助けられるようになりたいと思
います。今は無理だけれど、いつか私もおばあち
やんのような人になって、みんなを助けて、みん
なから認めてもらえる。そんな人になって、おば
あちゃんに
「やったよ。」
と言いたいです。

どんどん伝われハッピーウイルス

戸塚東小学校 六年 大谷 陽琉

ぼくたちが六年生になり、少し経ったころ先生がぼくたちに、

「今度、一年生のそうじを手伝ってくれる人は、いますか。」

と、聞いた。ぼくは迷うことなく、手をあげた。

近くの友達も、迷わず手をあげていたので一緒に手伝うことになった。それが、ぼくたちと一年生の出会いきつかけとなった。そうじを手伝いに行くようになって一年生の顔や名前を覚えた。一年生は、ぼくのことを覚えてくれた。仲良くなっていき、ぼくたちは、一年生と関わる機会が増えていった。休み時間に外で遊んだり、話したり、困っている子がいたら手助けしたりした。

そうしているうちに、たくさんの人に感謝されることが多くなった。一年生はもちろん先生や一年生の子のお母さんたちからも、
「遊んでくれてありがとう。」

「毎日お世話してくれてありがとう。」と言われるようになった。ぼくは自分がやりたくてやっていたことだからとてもびっくりした。でも、とてもうれしかった。

それをまわりの先生やぼくのお母さんにもほめられるようになった。ぼくだけではなく先生やお母さんまでうれしいと言ってくれた。知らず知らずのうちに、まわりの人を喜ばせて笑顔にできていたんだ、と気がついてまたうれしくなった。

ぼくは、まわりをよく見て人のためにも、自分のためにもなる行動をとることをふ段から心掛けるようにしていこうと思う。この先、中学生になって後はいが出来た時にも、一年生との関わりで経験したことを思い出しながら生かしていきたいと思った。

ぼくが今、一年生にやさしくしていることでその一年生もまた下の学年にやさしくしたり、六年生になった時にもぼくたちを思い出してくれたらうれしい。こんな風に、だれかがだれかにやさしい気持ちで接していくことがとても大切なんだと思う。いつもニコニコしていて、幸せをふりまくことをハッピーウイルスと呼ばれていることを聞

いたことがある。ぼくは、そんなハッピーウイ
スをふりまいていきたい。そして、まわりの人び
とにもハッピーウイルスが伝わってたくさんの人
が幸せな気持ちになっていくことをぼくは、願う。

「伝わるよろこび、伝える声」

戸塚東小学校 六年 川本 武蔵

ぼくは、何かを決める時、自分から率先して行動していませんでした。ですが、高学年になるにつれ、自分から行動するようになりました。だれかがやるまで何もしなかったり、だれかに言われてやったりと、言われたらやるという感じでした。やりたい気持ちがあっても、他にやりたい人がいれば、その気持ちをあきらめたりもしていました。

でも、六年生になって放送委員長に立候補して、多数決でぼくが、みんなから選ばれた時、「がんばらなくちゃいけない」と心の中のやる気スイッチが入ったのが、自分でも分かったような気がしました。

なぜ、放送委員長になろうと思ったかというと、ぼくが五年生の時、その当時の委員長さんが、みんなを支えていて、その姿にあこがれて、自分も支えられる人になりたいと思ったからです。そして、その教えを引きついで、放送機器の使い方か

ら声の出し方まで、自分の経験を生かしながら、相手の立場になって伝えるよろこびを初めて体験しました。

今までは、「ありがとう」を伝える立場だった自分が、委員長になって「ありがとう」と言われる立場になりました。そこから、見える世界が変わったように、自分から行動するようになったのです。放送委員長として、毎日、放送を気にかけるようになりました。放送が少しでもおかしいと思ったら、すぐに放送室にかけつけました。自分がやらなければいけないという責任感が芽生えたのかも知れません。

また、放送から伝わる言葉は、目では見ることが出来ず、声でしか届けることが出来ません。だからこそ、その時その時の自分の感情や話をしていく時の状況、気持ちの変化で伝わり方は違ってくると思います。声の出し方でも変わってくると思います。話し方の語尾が上がるか下がるかでも、伝わり方は変わってくると感じました。ぼくは、どんな時も相手の気持ちを考えて行動することが大切だと思えるようになりました。

今年、コロナ禍で活動しなかった朝の放送が

再開しました。戸塚東小学校のみんなが、明るく
元気に一日を過ごせるように、放送委員全員で気
持ちを込めて、今日も、放送したいと思います。
「今日も一日、明るく元気に過ごしましょう。」

あたたかい家族

戸塚東小学校 六年 平戸 心彩

私のしょう来の夢は、笑顔が絶えないあたたかい家族を作ることです。

私は、まだしょう来の夢や、なりたい職業が決まっていません。なので、しょう来の夢の事を考えたときに、最初に思い浮かんだのが、私がいつも過ごしている今の家族みたいに笑顔が絶えないあたたかい家族を作りたいと思ったからです。

私の家族は五人家族です。そして猫も六匹飼っていて、とてもにぎやかな家族です。私の家族は一言で言うと笑い声が大きく、誰かが笑うと家族のみんなが一緒になって笑い、とても明るくなります。こんな今の家族が、とても大好きです。

私のお父さんは、おこるととてもこわいですが、色々な所に連れて行ってくれて一緒になって楽しんでくれます。それに、私たちのわがままにもたくさん付き合ってくれます。たまに、子供よりかはしやいでしまう事があるけれど、そんなお父さ

んが大好きです。私のお母さんは家族の中で一番みんなを笑わせてくれる、面白いお母さんです。けど、家族の誰かが困っていたら、何でも相談に乗ってくれるし、すぐに助けてくれる、頼りがいのあるお母さんです。私のお姉ちゃん、高橋生になり、私はお姉ちゃんの真似をよくします。よく流行りの話題を話したり、一緒にダンスなどをしたりしてくれるやさしいお姉ちゃんです。私の弟は、私と一才しか年齢がはなれていないので、よくけんかをしてしまいますが、一緒に出掛けたら、一緒にゲームをしたりしていて、何だかんだ仲が良いと思います。

この笑顔が絶えないあたたかい家族を作るために一番大切なことは、常に笑顔でいることと、みんなとたくさん話すことが大切だと思います。なぜならもし誰も笑顔じゃなかったり、誰とも話をしなかったりしたら、家族全体が暗い雰囲気になって、誰もいい思いをしないから、私は、笑顔と話しをすることが大切だと思います。家族みんな、笑顔が絶えないあたたかい家族でいられるのは、お父さんとお母さんのおかげです。お母さんとお父さんはよく私たちを笑顔にしてくれて、明

るく楽しい雰囲気になさしてくるので、私もお母さんとお父さんのように、みんなを笑顔にして、楽しませたいと思いました。

このように、私のしょう来の夢は、今の家族のような、笑顔が絶えないあたたかい家族を作ることです。

人のために行動したこと

辻小学校 五年 瀬川 叶愛

ある日、私は母といっしょに電車に乗って出かけました。目的地に着いて改札口をぬけると、すぐに後ろから声をかけました。「エクスキューズミー」と言いながら、外国人の男性が声をかけてきました。その外国人の男性はとても困っている様子で、いっしょうけんめい母に話かけていました。よく聞くと、今いる駅からある駅まで行きたいのですが、乗り換えの方法や、今いる駅構内の行き方がわからず困っていました。ですが、私と母は英語を話すことが出来ないのです、話しかけられた時、私と母はあせってしまいました。しかし、気持ちを落ち着かせて、もう一度きちんと聞くと、ようやく母が聞き取る事ができました。やっと目的もわかり、解決することが出来ると思ったのですが、そこには言葉のかべがありました。そんな時、母が急にケイタイを取り出してきました。母はとっさに翻訳アプリという、外国人

の人とアプリを通して会話をしたり、外国語を日本語に、日本語を外国語に出来るアプリを使って話しました。アプリを使ってからには急激にお互いの気持ちや、伝えたい事が伝わり、それからアプリを通して楽しそうに会話していました。私たちは、外国人男性を次に乗らなければいけない駅の改札口まで送ってあげる事にしました。その駅はとても広く、日本人の私達でも迷う事がある様な駅なので、口頭で伝える事もとてもむずかしい駅でした。男性は、とても申し訳なさそうにしていました。移動している間、母は常に笑顔で会話をしていた、相手の外国人男性も最初に声をかけてきた時よりも安心した様子にみえました。後から母に、「あの時は何を話していたの？」と聞いたなら「この駅は広いので迷路みたいですよ」や相手の男性からは、「本当にごめんなさい、あなた達の時間をうばっていないければ良いのですが」と言われて、母は「全然気にしないで下さい」と答えていました。二人ともおたがいを気づかいながら会話を楽しんでいる様子でした。

しばらくすると、目的の改札口へたどり着きま

した。私と母はみどりの窓口へ行き、男性が無事に乗る予定の電車のホームへ行ける様に手配してもらい、男性に説明をして、何とか彼の願いを叶える事が出来ました。母は、「どうぞ気をつけて行って下さい、良い旅にして下さい。」と伝えていました。男性は、私と母にとっても感謝をして、たくさんのお礼を言いながら、とても良い笑顔で改札口へ入って行きました。

今回の出来事で、私は初めて困っている外国人の人を手助けしました。外国人でなくても、知らない人を助ける事はとても勇気のいる事だなんて思っています。でも、いっしょに助けた母も外国人の男性も最初はおたがい不安そうでしたが、何とか会話できるようにいっしょうけんめい頑張って歩みよっている姿を見てとても心が温かくなりました。最後の別れの時に見た、母と外国人男性の笑顔を見たら、これからは外国人だけではなく、困っている人がいたら進んで手助け出来る自分になりたいなと思いました。今回の出来事は、母にとっても、私にとっても、とても貴重ですてきな体験になりました。

「当たり前」

南中学校 三年 土倉 侑馬

小学五年生までの僕にとって、朝起きて、学校に行き、勉強し、友人と遊ぶ：という一日は日常であり、「当たり前」となっていました。そんな「当たり前」の日常が送れなくなった出来事が起こりました。それは、新型コロナウイルス蔓延による、小学校の臨時休校や外出制限です。当時小学校五年生という、上級学年だった僕達には、小学校のまとめとして、たくさんの楽しみにしていた行事がありました。そして、学校での友人との何気ない会話が奪われたことは、大きなダメージだと、のちに気づきました。

僕の一日の約四分の一の時間を占めていた学校生活は、今の自分の考え方を形成する大きな手助けとなり、性格も小学校時代に形づくられたと感じています。しかし、小学校時代の僕がそんな事を考えられるはずもなく、学校生活がただ楽しみであり、居心地の良い場所だとは思っていません

んでした。そんな学校生活に色を付けてくれたのは、他でもない友人達だと思います。僕が何を楽しみにして学校に行っていたかというところ、勉強よりも友人との会話でした。また、クラスという空間が居心地の良い場所に感じられていたのは、友人達が僕の個性を認めてくれていたからです。しかし、コロナ禍では、こんなに何気ないささいな嬉しい日常を送ることさえもが難しくなったのです。

当時の僕は、学校生活がただの日常、「当たり前」と考えていたのでしょう。だからこそ、小学校が休校になり、急に友達と会えなくなったことは、突如として日常を失い、自分の心に大きな穴が開いたように感じた出来事でした。「当たり前」が「当たり前」として機能しなくなったのです。

ここで初めて僕は、友人がいつでも周りにいるということとは「当たり前」ではないと気づきました。そして、コロナ前の日常のように「当たり前」が「当たり前」であり続けるということは、奇跡の連続だったということに改めて感じたのでした。そして、中学生になってからの友人との会話は、今までの日常生活にはなかったマスク越しのもの

になりました。マスクをし始めたばかりの時は、相手の表情が見えない分、以前よりも相手の気持ちを考えて、一言一言を発していました。しかし、コロナ禍となり四年となった今では、このような相手を気遣う行動も、コロナ以後の新しい「当たり前」となっていきました。マスクだけではなく、今は日常となつて自分の体を守るためにしていただの行動も、コロナという非日常によつて、「当たり前」となつた行動です。

ここで僕が一番伝えたいことは、「当たり前」はずっと続くものではなく。何の前触れもなく壊れていくということです。また、日常を壊した非日常に僕らが適応している間にいつのまにか、それまでの「当たり前」が新しい「当たり前」に塗り変えられていきます。非日常前の「当たり前」は二度と返ってきません。今のコロナ禍についても同じだと思えます。コロナ関係なく無邪気に遊んでいた日々から一変して、コロナ対策を続ける日々になりました。そして、コロナが緩和してきている今ですが、コロナがない世界に戻すことは不可能だと思えます。

コロナが突如として蔓延し、僕らの日常を壊し

たように、次いつ同じようなことが起こるかは、誰にも分かりません。そして、失ったものの大切さは、失つて初めて気が付きます。

だから僕は、家族や友人、そして自分自身を大切にし、目の前にある「今」を生きていくべきだと強く思っています。

あの子も

青木中学校 三年 塚本 三菜

二年前の四月、私は水泳部に入部した。四歳から始めた大好きな水泳が中学生になっても続けられることを喜ぶとともに、これからの自分の活やくに期待していた春だった。私たち七十五期生水泳部は、男子五人と女子三人の計八人だった。私は学区外の小学校からこの青木中学校に入学した。学年で三人しか同じ出身校がいなかった。部活で「仲間」と呼べる人ができるのか不安だった。

本入部初日、二人の女の子が話しかけてくれた。二人は同じ小学校出身だった。私はそう聞いた瞬間、強い焦りを感じ思うように話すことができなかった。二対一で私だけ輪の中に入れないのではないかという不安がおそった。さらに、同じスイミングスクールに通っていたと聞くとその焦りは強さを増した。つい先ほどまで感じていた喜びと期待は少しずつうすれていった。

初めて一緒に練習した時だった。つらく苦しい

練習を乗りこえ私たちの仲は少し近づいた気がした。二人が話をリードしてくれるから、自分のことをもつと知ってもらおうとたくさん三人でくだらない話をしたりした。その時に私は、「これが仲間だ」と確信した。これから一緒にたくさん泳いで、笑って、泣いて、けんかして、仲直りして、もっと相手のことを知っていく仲間ができた。二人のおかげで男子とも話すきっかけが増え、私たち七十五期水泳部はどんな部活にも負けないくらい仲の良い「仲間」となった。

六月、私たちは入部してから初めての大会に出場した。大勢の人に見られることや初めて見る機械などで緊張がとまらなかった。私は百メートル自由形のタイムが良かったので先輩たちとフリーリレーに出場した。自分より経験豊富で背が高くて、きれいでかつこい先輩たちに迷わくかけてしまうのが怖かった。そんな時先輩は、「ここにいる四人はみんな仲間だから安心していいんだよ」と声をかけてくれた。他校の人と同じように緊張してるし、私たちのようにつらい練習を乗りこえてここにいるということを教えてくれた。私は、ずっと他校の人を敵と認識し、必ず勝たなくては

ならないと思い込んでいた。練習した場所は違うけれど、練習をのりこえ、同じ気持ちでいる。そんな人たちを「仲間」と呼ばず何と呼べば良いのかわからなかった。先輩たちは招集所でも積極的
に他校の人と話し、お互いに、「がんばろう。」と声をかけ合っていた。他のチームを敵と思うのでは無く「仲間」と思うことによつて緊張が少し軽くなつた気がした。先輩が引退した後も大会でみんな「仲間」と思うこと続けた。

二年生の夏、私は個人種目で県大会に出場した。市大会より人数が倍になったり、上位選手たちの全国・関東への切符争いがあることもあり、いつも以上に緊張していた。大会が始まるまでの一週間、私は無理矢理に、みんな仲間と考えてみたが、どうしても「仲間」と思うことはできなかった。自分のレースの招集が始まった。そこで他校の一つ上の先輩が話しかけてくれた。「県になると緊張するけどお互いがんばろう。」と声をかけてくれた。正直、緊張が勝っていたのでその時は何も感じなかった。だがレース後、疲れているはずなのに私のところに来て「おつかれさま。」と言いに来てくれたのだ。私は驚いた。きっとこの人は先輩と同

じ考えなんだと思った。あの日は「仲間」の「絆」を感じた。七十五期水泳部も、先輩も、後輩も、他校の子も全国・関東大会を狙うあの子も、そして一緒にレースを泳いだあの子もみんな「仲間」だった。この三年間ずっと「仲間」に支えられ泳いできた。

今、部活動を嫌だと思っている人たちへ。少し考えを変えて一回みんなを「仲間」と思つて欲しい。そうしたらきっと楽しく充実した部活動になると思う。

野球を通して得たもの

幸並中学校 三年 福原 侑眞

八月七日、私にとって中学生での野球生活は一区切りを終えた。努力して、本気に取り組んできた先に全国大会出場の目標を実現できたこの経験はとても有意義な時間だと思っている。何より野球がしたい仲間と過ごしてきた時間で得た結果であることが自分を成長させてくれたと思っている。

私は、小学生から始めた野球を中学の部活でも続けた。二年生で出場した大会は県大会まで勝ち進むことが出来た。先輩の足を引っ張らないように、先輩が引退してから、私は部長になった。先輩のように、勝てるチームを作りたかったが、部員が足りないため、合同チームでの活動になった。合同チームは、週末にしか合同の練習ができないため、私が今まで経験した練習内容を行うことがとても困難を極めた。人がいないということとは、準備、道具のセッティングに時間がかかり、一人

の負担が大きく、うまく回らない日々が続いた。練習メニューも今まで以上に入念に計画を立てなければならなかった。今まで教わったやり方が身につけているので、変わらず練習が出来ると思っていたが、先輩がいないだけで気が緩みがちなメンバーや、自分プレーに落ち込んでしまうメンバーなど、自分のプレーをすることより、チームのこと、メンバーのとの関わり方を気にしながら活動する面が多くなった。久しぶりに顔を合わせての練習試合では、練習不足に加え、連係ミスをするものが多かった。単純なミスが出れば出るほど感情が抑えきれず、プレーをしながらイライラすることが多く、監督の先生には、我慢するように何度も何度も注意された。試合を観戦していた母にも、一人でプレーをしない、自分から声かけて行動をしろと言われることが増えた。この時は、チームとしての練習不足を理由に、私は自分の練習をするのが一番だと決め込んでいた。

部活が休みの日は、部活とは別にクラブチームの練習に顔を出していた。クラブチームでは大勢でプレーができるので、刺激があり野球をする楽しみを感じていた。部長として試合をすることと、

クラブチームで試合をすること、ポジションやチームでの役割が違うだけで、同じ野球をしているのに、試合をする楽しさが違うことを感じた。クラブチームは、自分より上手な仲間が多く、自分が起用される場面に活躍することが求められた。もう少し試合で活躍したいと思ったが、ベンチにいるときはチームのために動いていた。そんな時、母に部活とクラブチームでの取り組み方が違うと指摘された。区別をしてきたわけではないが、部活の時の私は、環境を理由に他人のせいに行っているところがあり、自分の仕事だけを全うしている姿がもどかしく、クラブチームでは自分の至らない部分を認め、自信のあるバッティングで努力して積極的に楽しんでいると指摘された。この指摘に正直私は驚いた。以前は一緒に野球をしてくれることに感謝していたのに、部活で野球をしてくれる仲間への配慮が足りていなかったのだと気づいた。それから、部活、クラブチーム共にチームのためにできることを考え、積極的に仲間に声をかけ、より一層チームに尽力するように心がけて過ごした。

この一年野球を通して得てきたもの、それは多

くの時間を費やし、共に切磋琢磨した仲間である。野球は一人では何もできない。プレーすることに限らず、仲間への敬意を失った時点で何も成長が来ない。自分への耳に痛い言葉こそ、自分を伸ばしてくれるきっかけであり、自分を見つめ直し、さらなる成長へと導いてくれるものだと感じた。中学野球を通して私と共に過ごしてくれた先生、仲間にたくさんの感謝を伝えたいと思う。私と野球をしてくれてありがとう。そして、また一緒に野球をしよう。

野球でつながった僕たちの絆

川口市立高等学校附属中学校

二年 小岩 大純

僕は野球部に所属しています。僕の学校の野球部は初心者ばかりでとても弱いのです。僕も中学一年生のときに野球を始めた初心者です。そんな僕たちですが、九月に控えている新人戦という公式戦で一勝するという目標を立てました。このような公式戦や練習試合でさえもまだ一勝をしたことはありません。しかし、僕たちはこの目標が達成できるように日々練習を積み重ねています。僕はこの練習で部員との、仲間との絆を感じました。その絆は互いに助け合い、前に進んでいこうと必死に頑張るときに感じられました。

僕の学校の野球部は、現三年生の三人が一昨年に作り上げてくれたものです。この三人の先輩たちはみんな、

「野球に興味があったから野球部をつくった。」と言っています。しかし、野球部は最低でも九人い

ないできません。だから、あと六人をどうにかして集めなくてはいいませんでした。先輩たちは、新入生歓迎という入学してきた一年生に部活と委員会を紹介する場での発表や仮入部などで僕たち一年に野球のおもしろさを教えてくれました。僕や現二年の部員もこのとき野球に興味を持ち、野球部に入部することを決めました。野球部に新しく入部することになった人数は六人でした。無事に九人集まり、野球部が完成しました。僕は野球部が完成したことで、仲間とこれから共に頑張ろうという絆が結ばれたと感じました。ここから僕たちの野球が始まりました。

練習のメニューは腹筋やブリッジなどで身体づくりをしたり、柔らかいボールでのキャッチボールをしたりするものでした。バットを振ることや軟式ボールを使うことはまだできませんでした。早くバットや軟式ボールを使って練習をしたいという気持ちがとても強かったです。しかし、このような練習を早く完璧にして、基礎ができるようになるという考えにだんだん変わっていききました。それは、仲間が練習を頑張っている姿を見たことで、僕もしっかりやらないといけないと思っ

たからです。簡単のような練習と感じるかもしれませんが、初心者の僕たちにはこの練習でもとても難しかったです。それでも仲間と励まし合いながら一生懸命練習しました。このときに僕は、仲間と助け合いながら練習を頑張って、上手くなっていこうという絆を感じました。そして、僕たちは約三ヶ月間の練習により基礎の力をつけ、念願だったバットや軟式ボールを使った練習ができるようになりました。僕は結構上手くなったと思っています。まだスタートラインに立ったただけでした。

僕たちは諦めず練習しました。しかし、初めての夏季強化大会という公式戦では、十九対〇という結果で負けました。ここまで力の差があるんだと感じました。少し悔しかったですが、もっと上手くなろうという気持ちがとても強かったです。仲間のみんなもこう考えたと思います。このとき僕たちは、もっと上手くなって戦えるようになるという絆が結ばれました。僕たちは近隣の中学校と合同チームになりました。お互い一生懸命練習しました。質の高い練習になり、とても力がつきました。しかし、練習試合や新人戦では勝利を

手にすることはできませんでした。それでも僕たちは諦めずに練習をしました。あつという間に進級しました。一年生も入部してきてくれて、十四人のチームになりました。一年生も初心者ばかりですが、少しでも早く上手くなれるよう練習しました。そして、三年生が出れるのが最後の試合、学校総合体育大会がありました。結果は四対〇で負けてしまったものの、とても良い試合でした。

僕は野球で仲間との絆をたくさん感じました。それは今でも同じです。僕はこの絆が無ければ辛いことを乗り越えられなかったです。だから、これから仲間との固い絆をたくさん結び、一勝できるように日々頑張ります。

今の自分から、過去の自分へ

川口市立高等学校附属中学校

三年 中村 茉莉子

「When in doubt, choose change.」迷ったら変化を選びなさい」という言葉を知っているだろうか。私が今、過去の自分に伝えたい事は「迷ったら変化を選びなさい」という言葉だ。この言葉は、香港で女優をしていたリリー・レオンという方が言ったものである。

二〇一九年の十二月、私が小学五年生だった冬に未知のウイルスが蔓延し、病院もショッピングモールも行く事ができず、学校にさえ通えなくなってしまう。この状態は翌年まで続き、楽しみにしていた修学旅行や校外学習がなくなり、さらには、卒業式までも縮小して行われたため、小学校生活の最後に、友達と歌うことすらできなかった。私は、中学校に上がってから、修学旅行に行ったり、コロナ前と同じ形式で卒業式をしたりしている後輩を見ては「なぜ私たちの年だけ何

もできなかったのだろう」と友達と悲しむことが多かった。そして、自分たちで何かを変えることは出来なかったのかと考えることもあった。

しかし、コロナの影響で苦しんでいた、あの頃の私が今この状況を見たら、どう思うだろう。確かにいまだコロナウイルスは無くなっていない。状況によってマスクをつけたり、買ってきたものを消毒したりとまだまだ気を抜くことはできない。しかし、学校で普段の授業から数人が、体育の授業ではほとんど全員がマスクを外して生活し、お互いの顔を見て生活している。コロナ前の「当たり前」が今の時代の「当たり前」に戻りつつある。このようにだんだんと「日常」が戻ってきたのは、世の中全体が、特別な対策から変わっていかうと意識が『変化』してきたからだと思う。その結果、四年前とは見違えるほどに生活が変わった。それなら、私も四年前に自分の行動を変えていれば何にもできなかった最後の小学校生活をより良いものにできたのではないかと思う。私はいつも変化を嫌ってしまう。何かが変わり、それが悪いほうへと影響してしまうことを恐れてしまうからだ。

しかし、中学二年生の秋、私は変わる決心をし

た。生徒会選挙の生徒会長選に立候補したのだ。その理由の一つは、開校したばかりの新しい学校に自分の手で伝統を創りたいと思ったからだ。私が中学校に入学した後もまだコロナの影響が大きかった。そのため、後輩が入学してからも、他学年と交流できるようなイベントはほとんどなく、同級生の中から「もっと後輩と関わりたい」というような声が多く上がってきた。とはいえ新たなイベントを創ることはそう簡単にはできない。しかし、このまま他学年との交流が少ない学校にしていくのは違う。私はそう感じ、自分が生徒会長として学校を引っ張り、変えていきたい、と立候補する選択をした。

私は生徒会長になってから、生徒会役員や先生方の協力のおかげで今年の春、同じ地域から入学してきた後輩たちと交流できるイベントを無事創り上げ、開催することができた。他学年の生徒と会話するきっかけになったり、お互いを知ったりすることができ、学校がより明るい雰囲気になったと思う。変わることで良い結果を得ることができたと痛感した。

自分が変化することは、成功だけではなく、失

敗も、やめたいと思うこともたくさんある。自分以外のものを変えることは更に難しい。しかし、私は『変わることに』は、怖いものや諦めるものではないと感じた。そして、自分が変わろうと思えば、周りの人は応援してくれ、手を差し伸べてくれる事も分かった。もちろん、全ての人がそうとは限らない。しかし、自分が納得するまで変化し続けることは、自分の成長のために最も大切なことだと思う。

私は、変わることを拒否してきた昔の自分に今、この言葉を伝えたい。「When in doubt, choose change. ~迷ったら変化を選びなさい」と。

佳

作



夢をかなえるために

青木中央小学校 五年 小平 透真

ぼくは、しょう来何になりたいかと考えた時にすぐ「これになりたい」とハッキリ答えられませんでした。なぜなら、小さい時は仮面ライダーや正義の味方みたいなヒーローにあこがれていたけど小学生になって、ぼくたちがくらしている社会にはとても沢山の仕事があると知ったからです。例えば、学校は先生が生徒に勉強を教えてください。仕事場というイメージがあります。だけど勉強を教えてくれる先生以外にも校長先生や保健室の先生、教科ごとの先生、指どう員の先生、図書室の先生、校む員さん、事むの先生、給食調理員さんなど色々な仕事をしている人が沢山働いています。学校だけでもこんなに沢山の種類の仕事をしている人たちがいるので、世の中にはいったいどれぐらいの職業があるかなあと思いました。

ぼくは、そんな沢山の仕事をしている人たちの中で生活をしていて、最近はお父さんの仕事やお

母さんが昔していた仕事にも少しずつだけ興味が出てきました。お父さんの仕事は工業薬品を仕入れて、それを使う他の会社や工場に運ぶことです。色々な手続きをしたり、書類を作ったり重たい薬品を運んだりします。お母さんの昔の仕事は、歯科えい生士です。歯科医院で働いていて、歯医者さんの横に付いてアシスタント業務をしたり、かん者さんに歯ブラシ指導や歯石を取る仕事をしていました。二人の仕事の種類や内容は全然違うけれども、お父さんの仕事は会社と工場をつなぐ役割があつて、お母さんの仕事は人の健康を守る役割があつて人の役に立つ仕事なんだと分かりました。そして、ぼくもしよう来は何か人の役に立つ仕事につけたらいいなと思っています。

そんなぼくの夢をかなえるために今からでもできることはないか考えてみました。人の役に立つ事や仕事は、とても沢山あると思います。その沢山の中から自分が興味を持てるものを見つけたり、どんな勉強をしたらなれるのか調べたりしてみようと思います。しょう来どんな職業に付きたいと思ったり、どんな事を勉強したいと思っても色々な夢をかなえられるように今からできる事を色々

とやっておきたいと思いました。

委員会で学んだこと

青木中央小学校 六年 伊藤 詩織

私は小学校の図書委員です。今年、とても嬉しい出来事がありました。それは、図書室の本が全てバーコードで管理されるようになったことです。バーコード化されたことで、今まで手書きで貸し出しの手続きを行っていましたが、機械で読み込むだけでできるようになりました。貸し出しカードを探す手間もなくなり、短時間でより多くの人が借りることができるようになりました。借りる人も返す人も、図書委員の仕事も楽になりました。今まで時間がなくて借りられなかった人も、借りられるようになったのでよかったです。

このバーコード化の作業は、私たち六年生と、先生方と、ボランティアの保護者の方で行いました。一冊ずつ手作業でバーコードを貼るという気の遠くなるような作業でした。途中でバーコードを貼る位置を間違えてしまった人がでるハプニングもありましたが、みんなで助け合い、協力して

無事に終えられたときには嬉しかったです。また、普段図書室を利用する人も、あまり利用しない人も、図書室の為に頑張ってくれたのだと思うと、胸が熱くなりました。また、二学期からバーコード化できたのは、学校の為にできる限りの協力をしてくださった保護者の方々のおかげだと思います。

私たち六年生は今年度卒業するので、バーコード化の恩恵をうけるのは主に五年生以下です。しかし、私たちは誰ひとり「自分達にはメリットが少ない」ということは口にせず、率先して仕事をしました。バーコード化に向けて、沢山の方々に協力していただいたということを感じ、協力や善意の大切さを学びました。

私は今、とても楽しく学校生活を送っています。私は毎日の学校生活の中で、友達や先生方、保護者や地域の方々に支えられて今の私の暮らしがあるのだということに気が付きました。図書委員長になって、みんなをまとめたり、発表したりするような目に見える仕事以外にも、本やカードを並べたり、学年ごとにおすすめの本を考えたりするような、目に見えない地味な仕事も沢山あるのだ

ということにも気が付きました。案外、世の中は、
そういう地味な仕事こそが大切で、地味な仕事を
みんなが分担することで成り立っているのかもしれ
ないと思います。

私が祖父に教わったことの中に、「恩は返すより
も送る方が大切だ」ということがあります。誰か
にいいことをしてもらったら、その人に感謝を伝
えるのは当然ですが、その恩を他の人に送ってい
くと、より多くの人にいいことが伝わる、という
考え方です。

今までたくさんの人に支えられてきたことへの
感謝の気持ちを持ち、私は私のできるやり方で学
校を支えていきたいと思っています。

任された仕事

青木中央小学校 六年 地藤 龍之介

僕には、皆さんの為に、がんばった行動の結果として、自分自身の成長と、喜びにつながった経験があります。それは、僕が通う小学校の校内音楽会を校内の皆や保護者の方々に伝えるポスターを制作した時のことです。

僕は今まで、音楽会以外の行事のポスターやイラストにも挑戦してきましたが、今回の音楽会は六年生として迎えるコロナ禍があけてからの最初で最後となる全校で行える音楽会だったので、全力を注ぐぞ、と意気込んでいました。そして、クラスメイトとの競作を経て、音楽会のポスターの担当に選んでもらうことができました。そして、無事学校の音楽会のポスターに選んでもらえたこと、そして皆のためになる大仕事ができることに不安も抱きつつ、ほっとすることができました。そして、その事の喜びで胸がいっぱいになりました。

そして、いよいよ本番で使われるポスターを描きはじめてとき、イメージどおりに満足のいく作品を作り上げることができのかなど、不安もありました。さらに、皆のため、お世話になった人のため、校内音楽会と学校を盛り上げるため、そういう意識をして作りました。

しかし、作品を描いている一方で、途中から、この大仕事をやり遂げられるかが不安になりました。そんな時に先生は、「みんなが僕のことを期待してくれている。」とはげましの言葉を言ってくれた時、一つ不安が消えました。そしてその時、この先生のメッセージは僕への心からのやさしさ、つまり人のための思った言葉だったと気づくことができました。よりポスターの制作に尽力することができました。

校内音楽会の当日になって、いざ会場に行くと、ホールを見てみると中央に自分が精魂込めて描き上げたポスターが目に入りました。今まで人の役にたつことがどのようなものか考えることもなかったけれど、ポスターを見てくださる校内の下級生や保護者の姿を見た時、人の役にたつ仕事を経験できてとても良かったなと心の底から思うこと

ができました。

人の為になること、役に立つことはニュースや本に出てくるような難しいことではなく、認められようという考えからするものではなく、真心をもって日々している当たり前の行動が特に大切なものであると思う体験をすることができました。大きな役だけでなく目立たない陰の部分の役であってもお互いが喜べるような行動に取り組んでいきたいです。

仲間が存在が大きな力になる

根岸小学校 六年 新井 希良々

私は、夢をかなえるために何が大切か、何が必要かと考えたときに一番最初に思いついたのが「仲間の存在」でした。

仲間は、同じことを一緒にすることの人です。なぜ私が仲間存在が夢をかなえるために大切と思ったのかというと一年前、私が五年生の時の持久走大会で仲間のおかげで大きく変わった出来事があったからからです。私は今までの一く四年生までの持久走大会では十一位でした。ギリギリ十位にとどかないのがすごくやさしかったので今年こそは十位以内に入りたいなと思い、持久走大会に少し近づいて来たころ、弟といっしょに家の周りの道を走ることにしたのです。ですが3日間位でやめてしまったのです。時は流れて何日かたった時、校庭で友達が走っているのを見ました。それがきっかけで校庭で走ろうと思い毎日のように走っていたら少しずつ一緒に自分の目標に向か

って走る仲間が増えていきました。最初のころの私は走ることも好きではなく体力もなかったのもうやめようかなと思ったことがありました。ですが、その時私は仲間を支えてもらって今、走れているということに気づきました。仲間の存在こそが私自身の目標に向かえると感じました。一緒に走っている時も、「がんばろう」や「まだまだいける」という声をかけてくれました。その言葉にどれだけ支えてもらったのか。走っていくうちにどんどん体力もついていきました。もし私が一人で走っていたらくじけていてやめていたかもしれない。ですが仲間がいてくれるだけで自分の気持ちも変わり本当に感謝でいっぱいです。それからも毎日走りつづけました。

持久走大会当日、仲間と走ったあの思いを胸にスタートのあいずで走りだしました。全力を出しきりゴールしました。結果は女子で十二位でした。目標は達成できなかったけれどなぜかすごくうれしかったです。

私は、仲間がいなければここまでこれなかったなという事をあらためて実感したのと、仲間のおかげで自分の目標に向かうことができたのでこの

ことは忘れることではないです。

私は、「目標」だけれど「夢」をかなえるときにも同じように仲間がいるかいけないかで、夢がかなえられるかられないかの第一歩が決まると思いますが。なので、そんな仲間を日ごろから大切にしていき、夢をかなえるための第一歩をふみ出していきたいです。

私は、夢をかなえるために「仲間の存在」が大切、必要だと思います。仲間の存在は自分にとって大きな力になります。私がこの先夢をかなえたいと思ったら仲間と一緒に同じ夢に向かいたいです。そして私自身もだれかにそう思ってもらえるような存在の仲間になり夢をかなえられる人になります。

人のために行動したこと

戸塚東小学校 六年 上原 幸晃

ぼくが四年生のころ、おばあさんに、お店の場所をたずねられたことがあります。

ぼくは、言葉で説明するよりも一緒に行ったほうが分かりやすいと思ったので、お店まで案内しました。その結果、おばあさんは無事にお店に着くことができました。その後、お礼を言ってくれたのでうれしく思いました。それと同時に、人の力になったので良かったなと思いました。

ぼくは、普段から心がけていることが三つあります。それは、「周りをよく見ること」「相手の気持ちを考えること」「思いやりのある行動をする」とです。一つ目の周りをよく見ることで、困っている人や悩んでいる人を見つけて、助けることができます。二つ目の相手の気持ちを考えることでは、相手にこれをしたらどう思うのかどう感じるのかということを考えると、相手を気づかした行動ができます。三つ目の思いやりのある行動

をするでは、相手の立場になって相手に寄りそって考えることです。実際に自分が雨に降られてしまい、傘がなくて困っている時、おじいさんが「傘を貸してあげようか、風邪をひいてしまったら大変だから。」と優しく声をかけてくれたことがあります。その時、ぼくは、うれしい気持ちになり、おじいさんのような、優しくて思いやりのある行動ができる人になりたいなと思いました。

先日、ジュニア救命士の講習を受けました。この講習では、人が意識を失なって倒れてしまった場合の助け方を学びました。人形を使って、心臓マッサージのやり方やAEDの使い方を練習しました。ぼくはこの講習を受けて学んだことを友達に教えて、みんなにも、人の命の救い方を知ってもらいたいなと思いました。

ぼくは、人のために行動することによって助けられた人、助けた人、周りで見ている人たちも、うれしい気持ちや温かい気持ちになれると思います。だから、ぼくは、これから困っている人が居れば直ぐに助けたり、人に親切にできる人でありたいです。そして、ぼくの行動を見て、周りの人たちも「人のために行動する」という思いやり

の輪が世の中に広がっていければ良いなと思って
います。

食器洗い

辻小学校 五年 鈴木 常葉

私が人のために行動したことは、父の食器洗いを手伝った事です。私の家は、普段は父が食器洗いを担当しています。食事前に食器を洗って、それから食事を作っています。

二〇二三年六月中旬のある夜、六時半頃、いつもより宿題が早く終わった私は、する事が無くなり暇になりました。お手伝いでもしようかと一階のキッチンを見たら、食器の洗い物が溜まっているのに目が留まりました。そこで私は、二階でデスクワーク中の父には秘密でエプロンをつけ、気合を入れて洗剤を泡立てて食器を洗い始めました。

私がお手伝いをしようと思った理由は、三つあります。

一、食器洗いの手間が省ける事で、父を喜ばせたかったからです。

二、私が食器洗いをやっていた事で父をびっく

りさせたかったからです。
三、褒められたかったからです。お手伝いをしたら「偉いね」や「ありがとう」と言われたかったからです。

私が食器洗いを済ませた後、仕事を終えて二階から降りてきた父が、シンクに食器がなくなっていると感じ、母に、

「あれ、洗い物が無い。ママがやってくれたの？」
「私はやってないよ。」

母が言うと、父は、今度は私に向かって

「もしかして常葉がやってくれたの？」

と聞きました。私がやったと分かり、

「やってくれてありがとう。おかげさまで楽しかったよ！」

と喜んだ様子でした。

褒められてすごく嬉しかったです。まるで期末テストで全部満点を取って褒められた時のように嬉しかったです。父を喜ばせる事が出来たぞ！というワクワクにも似た達成感がありました。家族の役に立って良かった、と思っただけでなく、これからもやりたいと思いました。最高のサプライズだと思います。

又、たまに家族に内緒で食器洗いをして、父や母を喜ばせたいです。達成感を味わいたいし、親子で喜びたいと思います。

人のために行動する事は、人のためだけでなく、自分のためにもなると思いました。何故なら、自分も、その人に喜んでもらえ嬉しくなるし、褒めてもらえるから、やってよかったと思えます。皆が笑顔になる方法の一つだと、私は考えています。社会全体が人のために行動出来るようになって、皆が笑顔になれる社会になったら良いと思います。

絆はいずれ自分を動かす原動力となり

青木中学校 二年 金子 真識

僕は、今中学二年生。先輩でもあり、後輩でもある。バレーボール部だ。先輩は七月いっぱいまで引退し、ついに僕らの代となった。僕は一年生の時からレギュラーで練習試合や大会などに出で活躍していた。先生やチームのみんなからは「来年のエースはお前だ」と言われていた。僕はチームの中でも身長が低い方で部内の二年生の中では一番小さかった。しかし、僕はジャンプ力や、空中戦での工夫をし、みんなからは「小さな大エース」と呼ばれたりもした。こんなに自慢げに綴っている僕だが、正直「辛いなあ」「辞めたいな」と思う日が多々ある。特に練習試合のある休日、夏冬春休み、ゴールデンウィーク等々。「一日くらいサボってもいいかな。」「もう辞めたほうが楽しい学校生活が送れそう。」「しょっちゅう思った。じゃあなんで辞めないの。この作文を読んでいる人はそう思うだろう。」「貴重な休みがなくなるなら辞めちゃ

えば」「たがが部活でしょ」そうだ。辞めたい理由はいくらでもあった。千手観音様でも数えられないレベルで。しかし、僕は辞めない。何故か。そこには絆があったから。今から二年程前の事。小学六年生になってすぐのことだ。僕は学校が終わったら学童に通っていた。そのため母親が迎えに来てくれた。帰りが遅くなるため家に着いたらすぐ風呂に入りご飯を食べながらテレビを見ていた。その年には丁度オリンピックがあり、ニュースではスポーツの話題や特集が取り上げられていた。そこで僕はたまたまバレーボールの話題をみた。日本代表の選手達の試合映像や練習風景が映っていた。みんな大きくて、力強くて、カッコいい。僕もこうなりたい。そう思った。次の日から僕は二十分休み、昼休みを使いバレーをした。校庭はみんながドッジボールや鬼ごっこをしていて空いているスペースはあまりなかったが、場所を見つけて壁相手一人でやっていた。バレーはボールを掴めない。空中にあるボールに触れられる時間はコンマ数秒。非常に難しく奥が深い。そして楽しい。十日くらい一人でやっていたら友達が数人寄ってきた。「混ぜて欲しい」「俺も入れて」と

言ってきた。人相手とやるのは初めてだったからうれしかった。しかし、パスはうまく続かなかつた。それから毎日、その子達と一緒にバレエをした。朝、休み時間、放課後、休日。空気があつたらずつとやっていた。特に、僕と他二人。計三人。校内ではずつと一緒にいて、みんなからは「バレ―三人組」と呼ばれるまでだった。「中学入ったら三人で絶対全国行くぞ」そう決めた。しかし、その夏に僕は引越した。すごく悲しかった。校長先生にお願いして小学校のうちはなんとか学校にいさせてもらえた。そこからあつという間だった。夏から秋、秋から冬、冬から春。そして卒業。僕達三人は、学校の近くの土手へ行き感謝や思い出を語り合った。そして、その時僕は約束した「中学入ったら俺がお前ら三人を叩き潰してやる」そして友達の二人は言った。「受けて立つ」その時はもうこいつらとは友達じゃなく敵同士になるんだなと思った。それと同時にどんな斧でも切れない絆を手に入れたんだなと思った。そして、この約束は僕がバレエを続ける理由をつくってくれた。そしてなにより、大事な事に気付かせてくれた。それは「絆は自分を動かす原動力となり、何かを

成長させる」ということ。何を成長させるかは今はわからない。多分人によって違うと思う。信じてきた友達、仲間、家族、敵、そして自分。これからも信じ続けて突っ走ればきっと、絶対、今よりも成長した自分に会えるはず。それまで僕はバレエを続ける。

「今、伝えたいこと。」

青木中学校 三年 安藤 拓海

私はこの夏休みに、川口市の青少年ボランティアスクールに参加しました。ボランティアにはずっと興味がありましたが、部活と塾で時間が作れずに参加しました。今年は中学三年生で部活も引退したので、参加してみようかなと思いました。

私がボランティアに興味を持ったきっかけは、東日本大震災です。当時私はまだ小さかったので覚えていませんが、テレビで東日本大震災の特集をやっているのを見ました。地震で家や建物が壊れて、津波で家や車や色々なものが流されていました。本当に起きたとは思えないくらい恐ろしい映像でした。被害にあった人は大変だなと思いました。テレビでボランティアの人たちが被害にあった人へ必要なものを届けたり、手助けをしているのを見ました。人のために頑張れるのはすごいと思いました。お金で支援するという方法もありますが、自分はお金をあまり持っていないので、

ボランティア活動に参加して、困っている人のお手伝いができたらと思っていました。

今回参加したのは、知的障害を持つ人のスポーツ体験のお手伝いや補助です。ボランティアをするのは初めてなので、行くまでは自分にできるのか心配でした。でも行ってみたら、大学生と高校生のボランティアの人もいて、親切に教えてもらいました。大学生のボランティアの人は、何度も参加していて慣れていました。色々やり方など知っていたので安心しました。

まず準備体操をして、それからバスケットボールをやりました。上手な人もいれば全く動かない人もいました。言うことを聞かない人や文句を言う人、大きい声をずっと出している人もいます。ドリブルをしないでボールを持って走っていく人など自分の好きなようにやっています。始めはどうしたらいいか困ってしまいましたが、楽しければいいのではないかと思えてきました。色々な人がいましたが、みんな無邪気で子供のような純粋な心を持っていると思いました。気が付いたら一緒に楽しんでいました。こういうボランティアもあるのだと知りました。こんな自分でも役に立つ

ことができるのだと嬉しかったです。人の役にたつことができる、自分に自信がつくような気がしました。

ボランティア活動に応募して参加しなくても人助けはできます。例えば、身近な人の悩みを聞いてあげる。落ち込んでいる人、元気のない人に声をかけてあげる。よくよく考えると、私は小学校のころから学校を長く休んでいる子に声をかけていました。家まで行って「明日学校に行こうよ」と誘ったり、「うちに遊びに来ない？」と元気になるように声をかけていました。そう簡単に学校へは来てくれませんでした。家で孤独になっていたのではと心配になってしまいうのです。家に行つて元気そうな顔を見ると安心します。もしかしたら迷惑かもしれません。でも、自分の行動で喜んでくれているとしたら、そう考えると一歩踏み出す勇氣になるのです。

これから先、身近な人や出会った人が困っていたら手助けしていききたいです。知っている人だけではなく、知らない人でもできることをしていきたいと思います。もし何か困っている人を見かけて、手伝ってあげようか迷っているなら、ぜひ勇

気を出してほしいと思います。みんなが思いやりを持って助け合ったらいい世の中になると思います。

「仲間との絆」

十二月田中学校 二年 石原 雪羽

中学校に進学し、私は、「仲間」について考えることが増えた。小学校の時から剣道クラブに所属しており、私以外同じ学年に女子がいない中、何とか六年間やり遂げた。中学校に進学後、剣道部に所属したが、小学生の時と同様一人になってしまった。ただ、小学生の時とは違うことがあった。それは先輩との繋がりが。中学校は小学校の時よりも先輩とのコミュニケーションの場が多くあった。そこで初めて私は一人じゃないと感じることが出来た。部活後には必ずミーティングを行い家ではその日の反省点を日記に書き、アドバイスをもらう。とにかくチーム全員で「勝利」にこだわりそのために切磋琢磨し合える「仲間」に出会うことが出来た。そこから、私は部活に行くのが楽しくなった。

「仲間」の大切さに気付いた大きな出来事がある。それは、六月の学校総合体育大会だ。私はス

タメンに選ばれ、試合に出ることが出来た。最初の二試合はなんとか勝つことが出来たものの、二本勝ちが出来なかったりと短時間で決着をつけることが出来なかったりとチームの足を引っ張る場面があった。決勝の一回戦目、私は勝てると思っていた相手に負けてしまい、大将が勝たないと敗退する展開になった。自分のせいで負けてしまうと思ひ、まだ勝敗はついていないにも関わらず、チームへの申し訳なさと思うような動きが出来なかった悔しさで複雑な思いだった。しかし、大将は見事に二本勝ちし、その後の試合に繋げられ、優勝することができた。この時、自分は一人で戦っているわけじゃないことや、同じ目標に向かって共に練習し、優勝を掴んだ達成感で涙が止まらなかった。誰のおかげ、誰のせいではなく、皆で一緒に喜びを分かち合えたからこそ私にとっては一生涯忘れられない思い出となった。

今年の四月、一年生の女子部員が六人も入ってきてくれた。今は先輩達が一緒に後輩を育ててくれているが、来年度は私一人で後輩を引っ張って行かなければならない。先輩と同じように後輩を指導できるか、引っ張っていきけるか不安に思うこ

ともあるが、先輩と同じではなく私は私なりに後輩と一緒に、「勝利」を目指していきたい。それを続けていけば、きっと後輩達も私についてきてくれると思う。こんな先輩になりたいと思ってもらえるようにこれからもチーム一丸となって頑張っていきたい。もし私が一年生の時に感じた不安を抱えている後輩がいたら気持ち分かる先輩として力になりたいと思う。なにかあれば気軽に相談できて、頼ってもらえるような先輩でありたいと思う。少しずつでも、後輩達との絆を強くできるようにコミュニケーションを欠かさず、仲間一人一人と真摯に向き合っていきたい。

様々なコミュニティに仲間との絆は存在すると思う。人間は一人で生きているように見えても必ず誰かに支えられ、誰かを支えている。国籍や性別、年齢などに関わらず同じ考えや同じ目標を持っている仲間に出会えることは本当に素晴らしいことだと思う。

努力は報われない

川口市立高等学校附属中学校

一年 杉本 萌々音

「努力は必ず報われる。」果たして本当にそうなのだろうか。では、良い結果がだせない人は、みな努力していないのだろうか。私はそうは思わない。

「努力が報われないのではなく、努力が足りないだけだ。」

と言う人もいるだろう。だが、私は実際に、受験を決めてから当日まで数ヵ月しかない中、体をこわすギリギリまで勉強したが、第一志望に合格できなかったという経験がある。

このように、状況によってはいくら努力しても結果にでないこともあるのだ。

みなさんの中にも、報われないなら無駄だと思いい、努力が苦手な人もいるのではないだろうか。私も実際、志望校に落ちたときはそう思った。自分がどれだけ努力を重ねても、才能がある人には

すぐ追い越されてしまうし、自分が今までやってきたことはすべて無駄だったのかと考えて落ち込んでいた。とてもつらい時期だった。

しかしその後、今通っている中学で生活する中で、今までやってきたことが役に立ったことがたくさんあった。第一志望校のために一生懸命勉強した理科と社会。私が勉強した中には、中学の範囲もいくつか含まれていたため、テスト勉強の際、難しい数学や英語に力を入れることができた。また、受験勉強を頑張った経験から、勉強そのものを楽しいと思えるようになってきて、一日中勉強していてもつらくなくなっていた。そして、最近、あのとき頑張ってよかったと思えるようになった。

このように、もともとの目標の「第一志望合格」は達成できなかったが、そのためにやってきた努力は決して無駄にはならなかった。目標を追う中でついた知識や技術はその後とても役に立ったし、落ちたときの悔しさも本気で頑張らなければ味わえなかったものだ。これは勉強に限らず、どんなものにも言えることで、努力は必ず報われるとは限らないが、無駄になることは決してないと思っ

ている。

私は今、部活で新しく始めた種目でちよつとした壁にぶつかっている。何回練習しても、家で動画を見て練習しても、なかなかできるようにならないのだ。前までの自分だったら、「頑張っても無駄だ。」と思い諦めていただろう。しかし、今は、「努力は決して無駄にならない。」と思い、できるようになるまでは時間が掛かるかもしれないが、家での練習も頑張っている。

皆さんの中にも、「失敗するのが怖い。」や「結果が出なかったらどうしよう。」と思ってしまい勇気が出ず、努力を始められないという人もいるだろう。しかし、目標に向かって努力することを得られることはたくさんあるし、その努力は必ずどこかで役に立つ。だからぜひ、皆さんにも勇気を出して目標に向かって頑張ってみてほしいと思う。

発行

川口市青少年保護育成本部事務局
川口市役所子ども部青少年対策室
川口市青木 2-1-1 (第二庁舎 3 階)
電話 048-258-1115